



Ishikawa Prefectural Library
Furniture Guide

石川県立図書館 家具ガイド





“百脚繚乱”の閲覧席

百種を超える 500席

吹抜けに面した席、風景を眺める窓際席など、
建築の地形が作る多様に加え、椅子それぞれが特徴を持ち、
まるで庭に咲く花のように図書館で過ごす時間を彩ります。

一人になりたいとき、
友人と語り合いたいとき、
集中したいとき、
くつろぎたいとき、
その日の気分にに応じて座りたい席が
きっとみつかります。



Furniture Design process



家具デザイン・監修

川上 元美 (デザイナー)

MOTOMI KAWAKAMI

プロフィール

1940年 兵庫県生まれ
1964年 東京藝術大学美術学部工芸科卒業(ID専攻)
1966年 同大学院美術研究科修士課程修了
1966年～69年 アンジェロ・マンジャロ・ティ建築事務所に勤務
1971年 川上デザインルームを設立

プロダクト、インテリア、環境デザインなどに従事しヒューマンなもののづくりや環境づくりを心がけている。
毎日デザイン賞、国井喜太郎産業工芸賞、グッドデザイン金賞、土木学会・田中賞、iF賞、German Design Award 等受賞多数。
日本デザインコミッティー理事、(公財)日本デザイン振興会元会長、金沢美術工芸大学名誉客員教授。



2F ラーニングスペース

石川県立図書館の家具の佇まい

図書館は単なる読書、学習空間のみならず、新たな情報収集やライフスタイルの体験や発信を誘発する開かれた文化装置です。

回遊式のスロープと階段状の大円形閲覧空間は刺激的で、車椅子でも平易にアプローチのできるアクセスビリティの高い空間です。

各階の書架が並んだ周囲にある閲覧エリアには、大テーブル、キャレル、ブース席、サイレントルームなどが用意されています。また文化交流エリアのラーニングスペース、研修室、食文化やモノづくりの体験スペースは、イベントとも連動でき、老若男女の活気溢れる交流の場になることが意図されています。

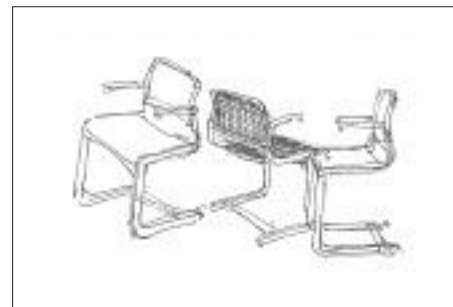
外光が射し込む各窓辺の「溜まり」や「佇まい」には、来館者の目的にあったコーナーで好みの時を過ごせるよう、様々な居場所を提供しています。椅子の選定においては、エポックメイキングなものも含む既成のものや新しくこの図書館のためにデザインしたもの、シンボルの用途のものなど基準は一定でなく、全体の調和を考慮に入れつつ、智に向かう文化度の高い土地柄に相応しいオーセンティックな環境作りを心がけました。図書館の基本である「本を楽しむ、知のために探す、本と共に考える」という行為が豊かになるよう、使う視点で選んだ約500席の様々な椅子が用意されています。

館内は東西南北のエリア毎に加賀五彩を用いた色分けがされていることから、家具も各エリアと同系色の色彩となるよう個々の張地を選定することで、エリアとしての統一感を生むように工夫しています。

好みの場所を探してください。

IPL-01・閲覧用椅子
デザインの過程

スケッチ

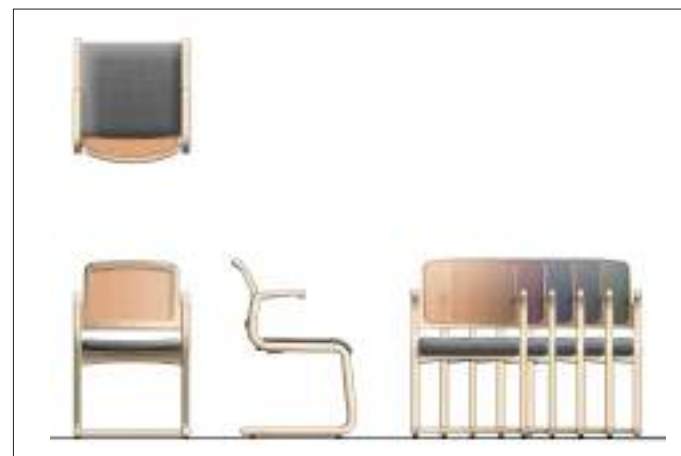


ドローイング

石川県立図書館の主に大閲覧空間に設置する椅子として新たにデザインし、製作した椅子。

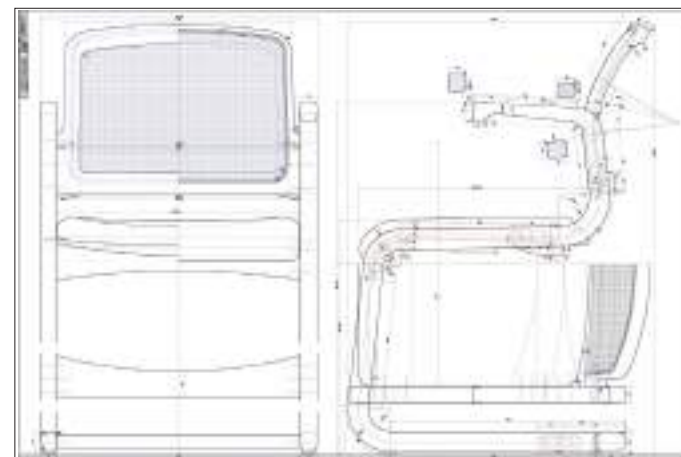
通路側を広く感じ取るために、また後ろを通る車椅子やベビーカーのためにも、通常の4本脚の椅子ではなく後脚のない、ブナ材成型合板のカンチレバーフレーム・タイプにした。

着座して楽なように、そして立ち居のし易いように肘掛(アーム)を少し短めにした。



製作図面

原寸図(1/1)の図面で製作に移行する。



完成品

背もたれ部に加賀五彩色の軽やかなテンションファブリック(メッシュ生地)を特徴的に用いて東西南北の方位の目印としている。座部は黒色の張り生地を使用。





※ 1



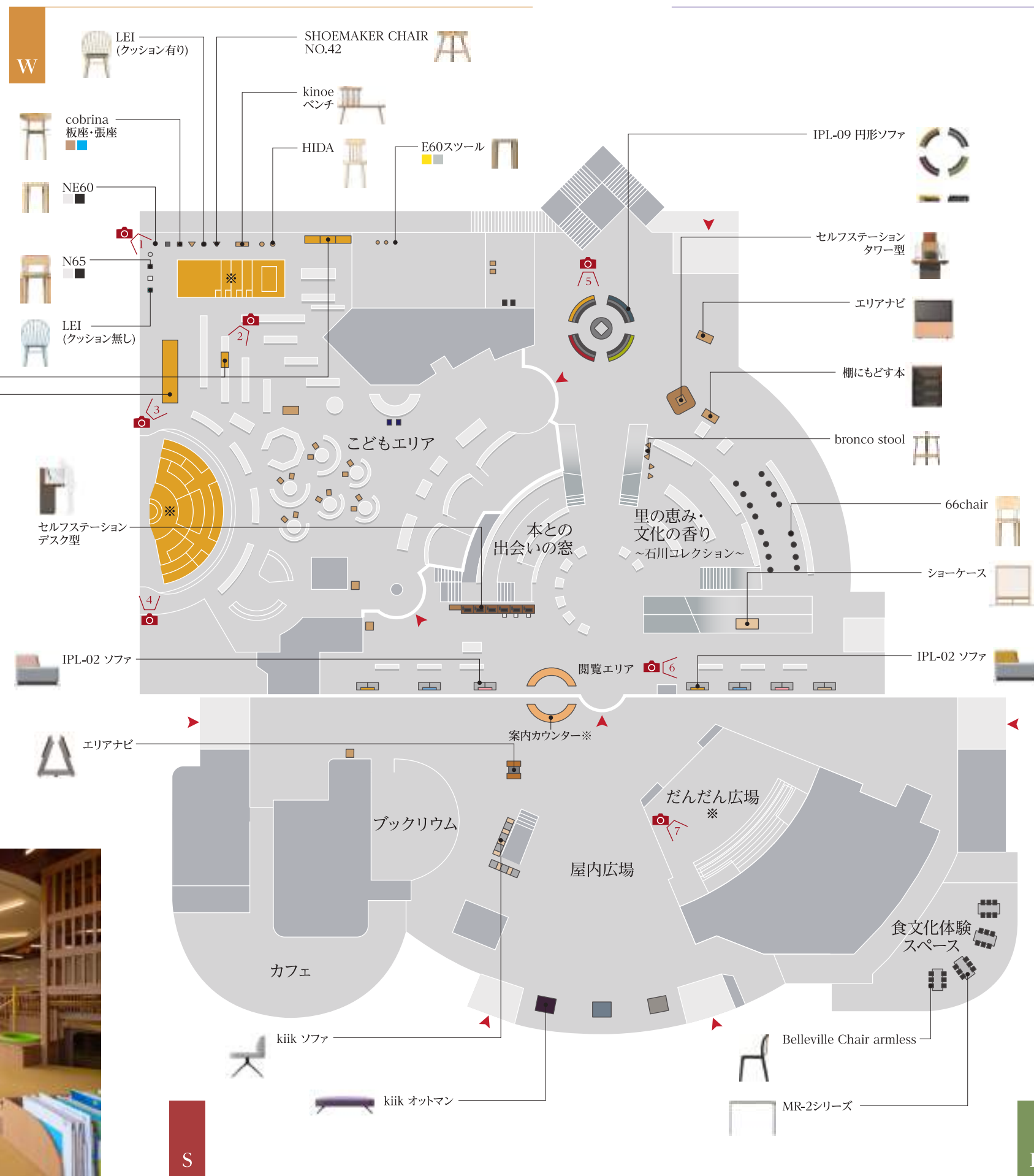
ボックス席 ※ 2



大きな机 ※ 3



※ 4



※ 5



※ 6



※ 7

1F



1



2



3



4

1:大閲覧空間のショーケース
2:セルフステーション タワー型
3:今日の新聞コーナー
4:エリアナビ



1



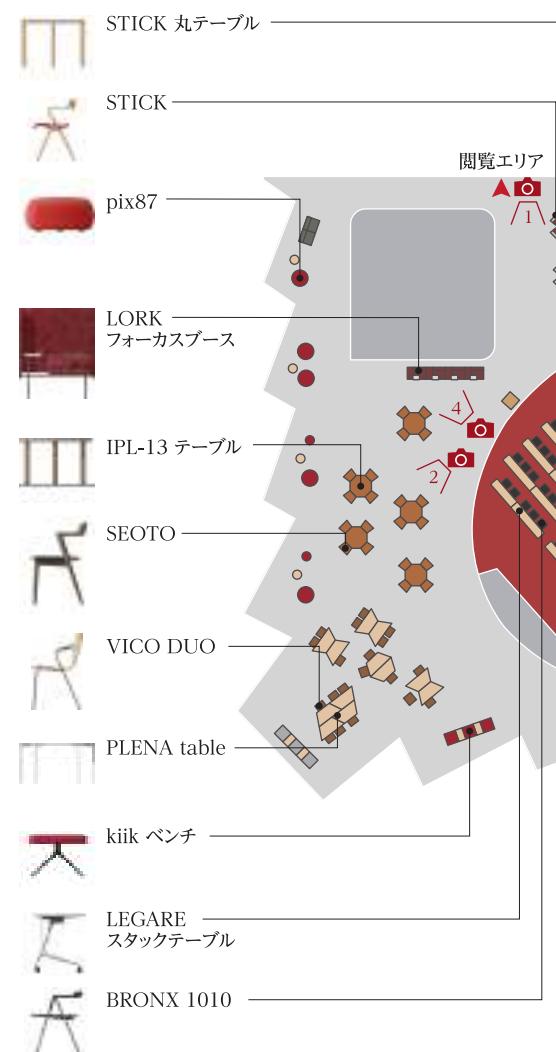
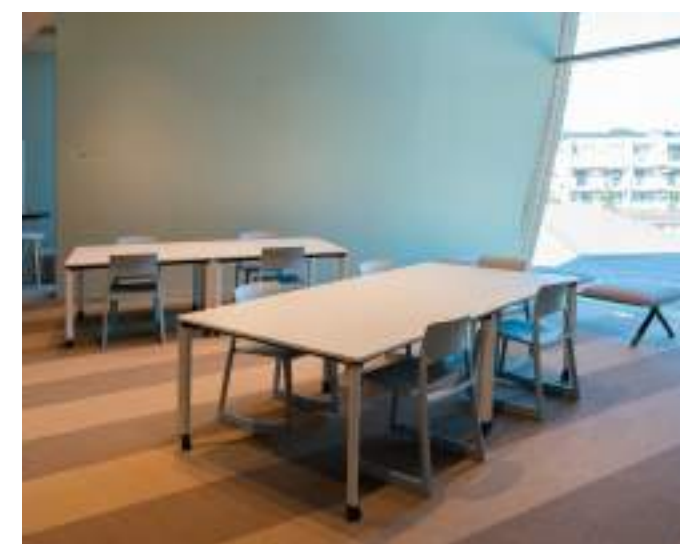
2



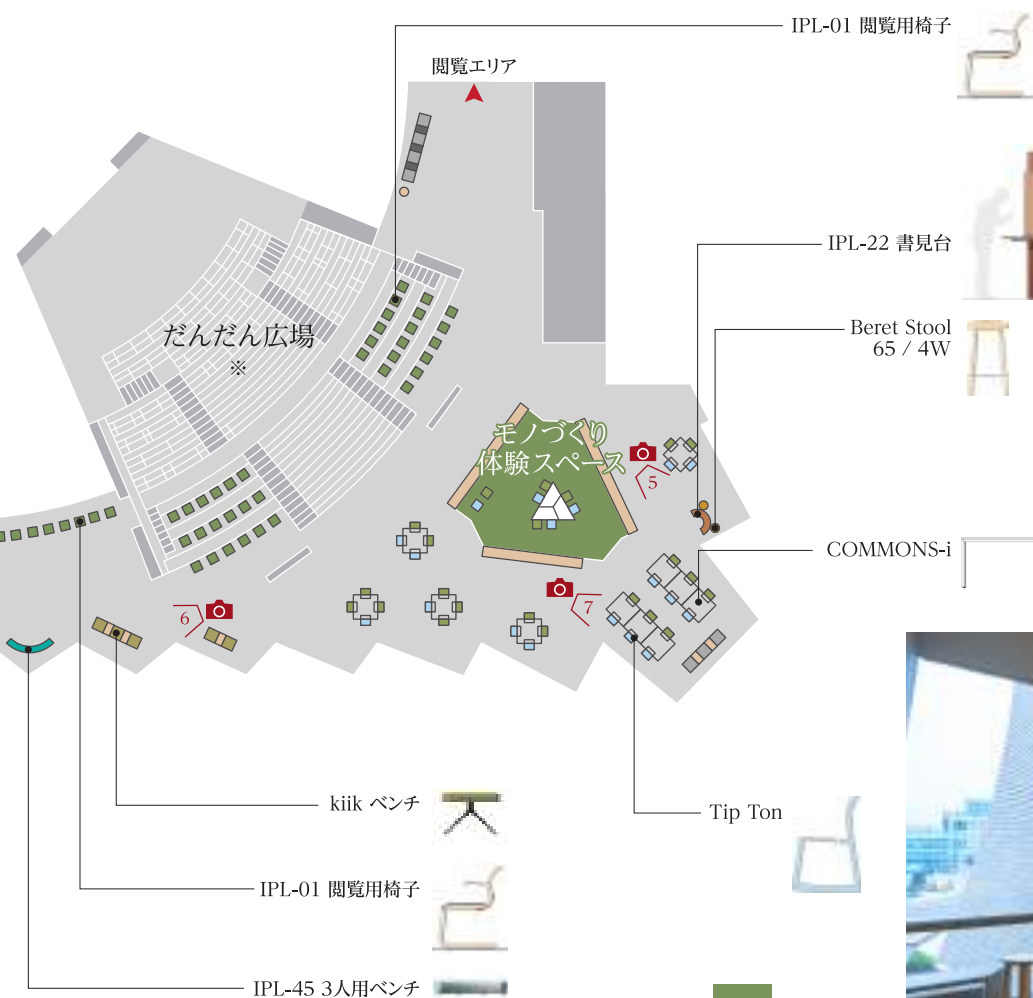
3

1:こどもエリアの窓際席
2・3:屋内広場





S



E

2F
S E



1



2



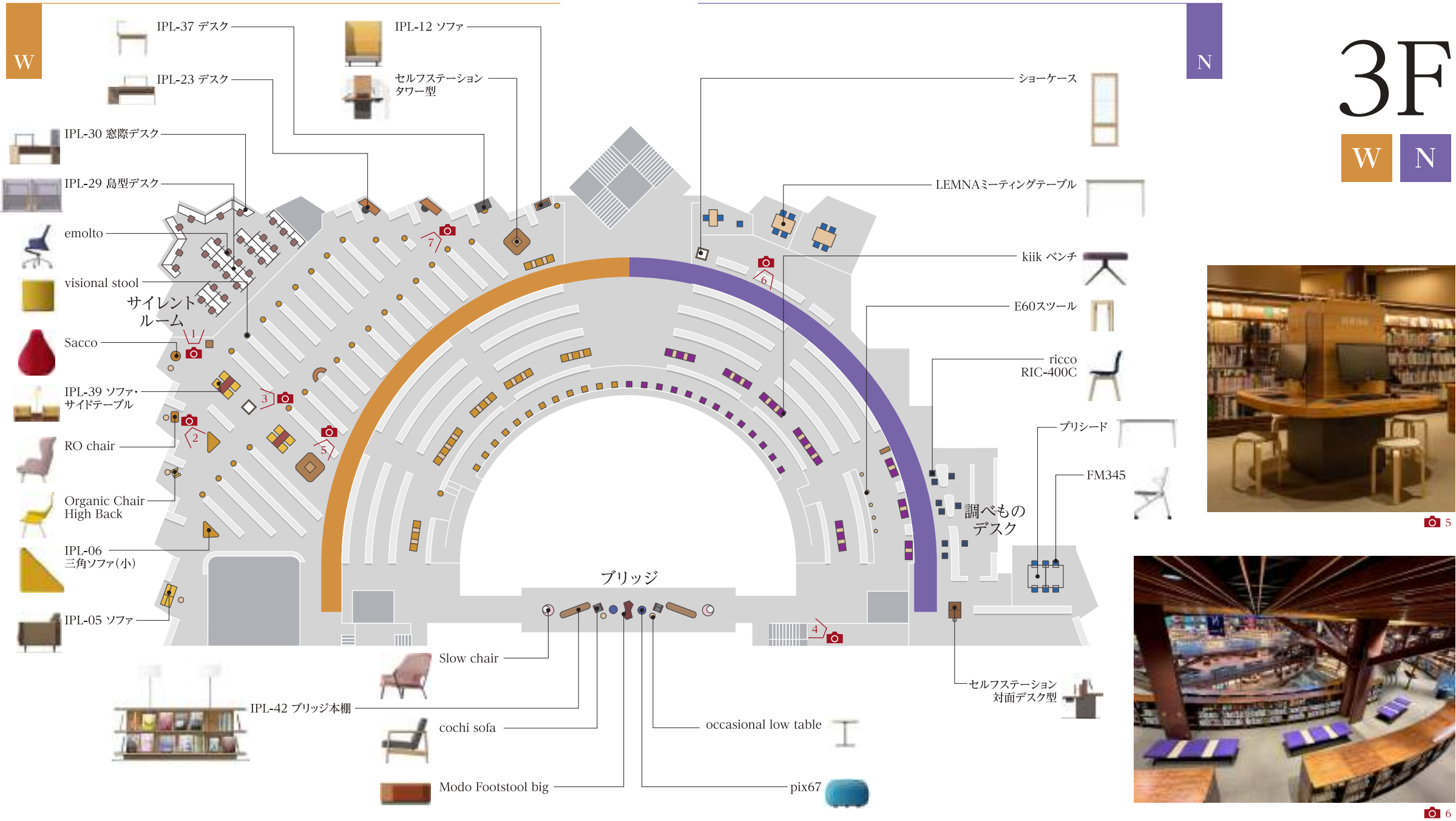
3



4



7



5



6



1



2



3



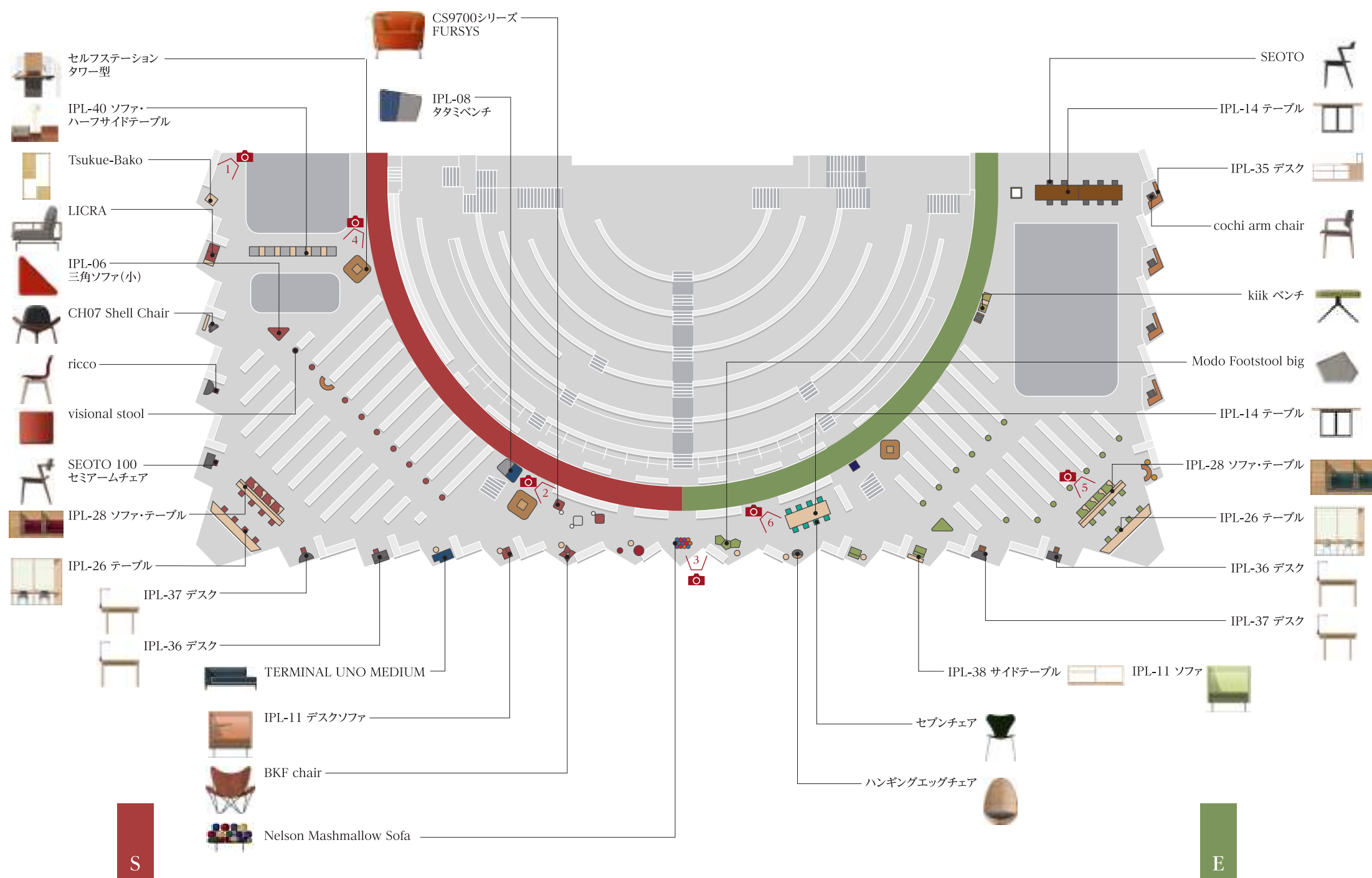
4



5



6



3F

S E
(窓際席)



カメラ 1



カメラ 2



カメラ 3



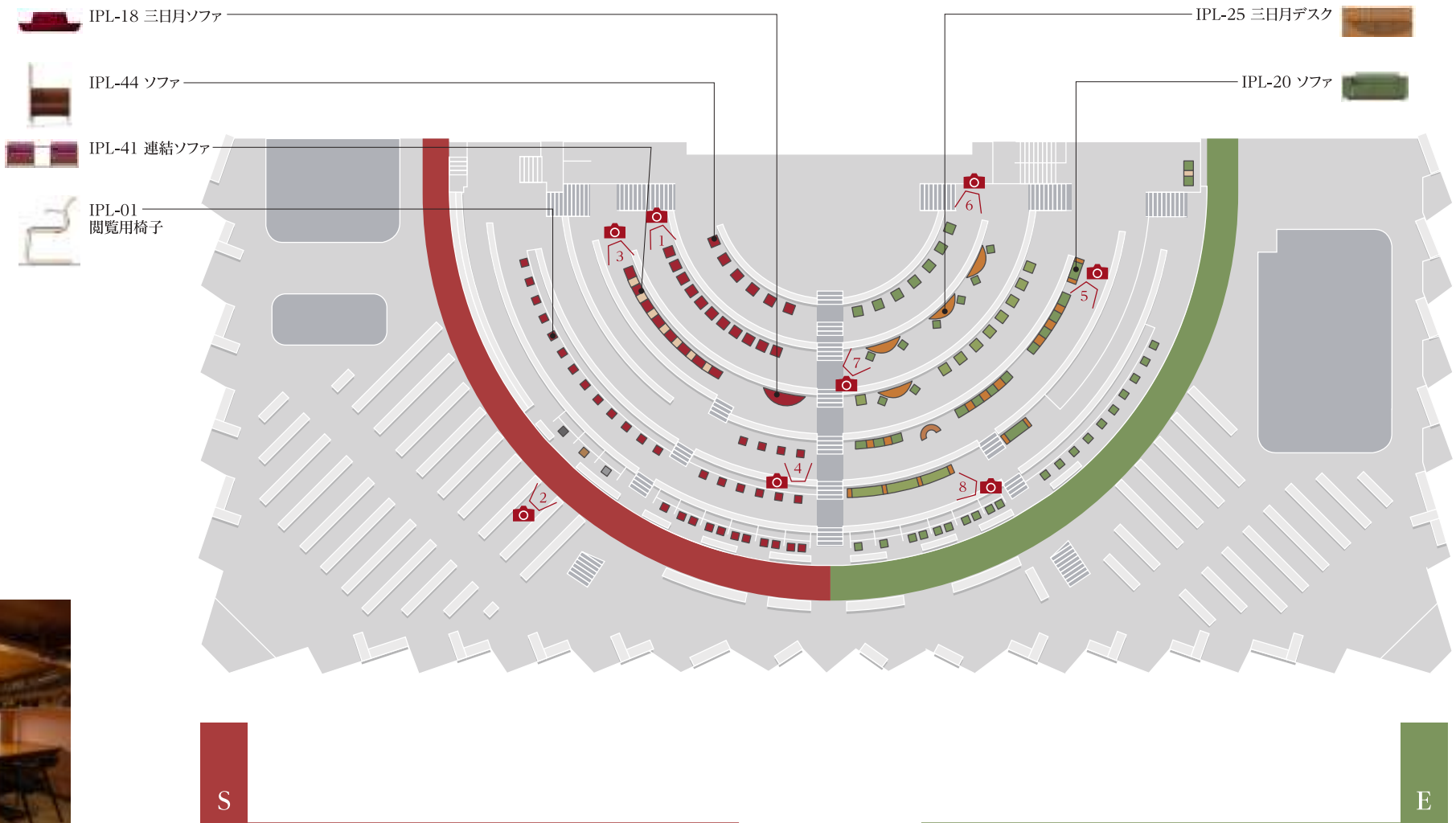
カメラ 4



カメラ 7



カメラ 8



3F

S E

(大閲覧空間)



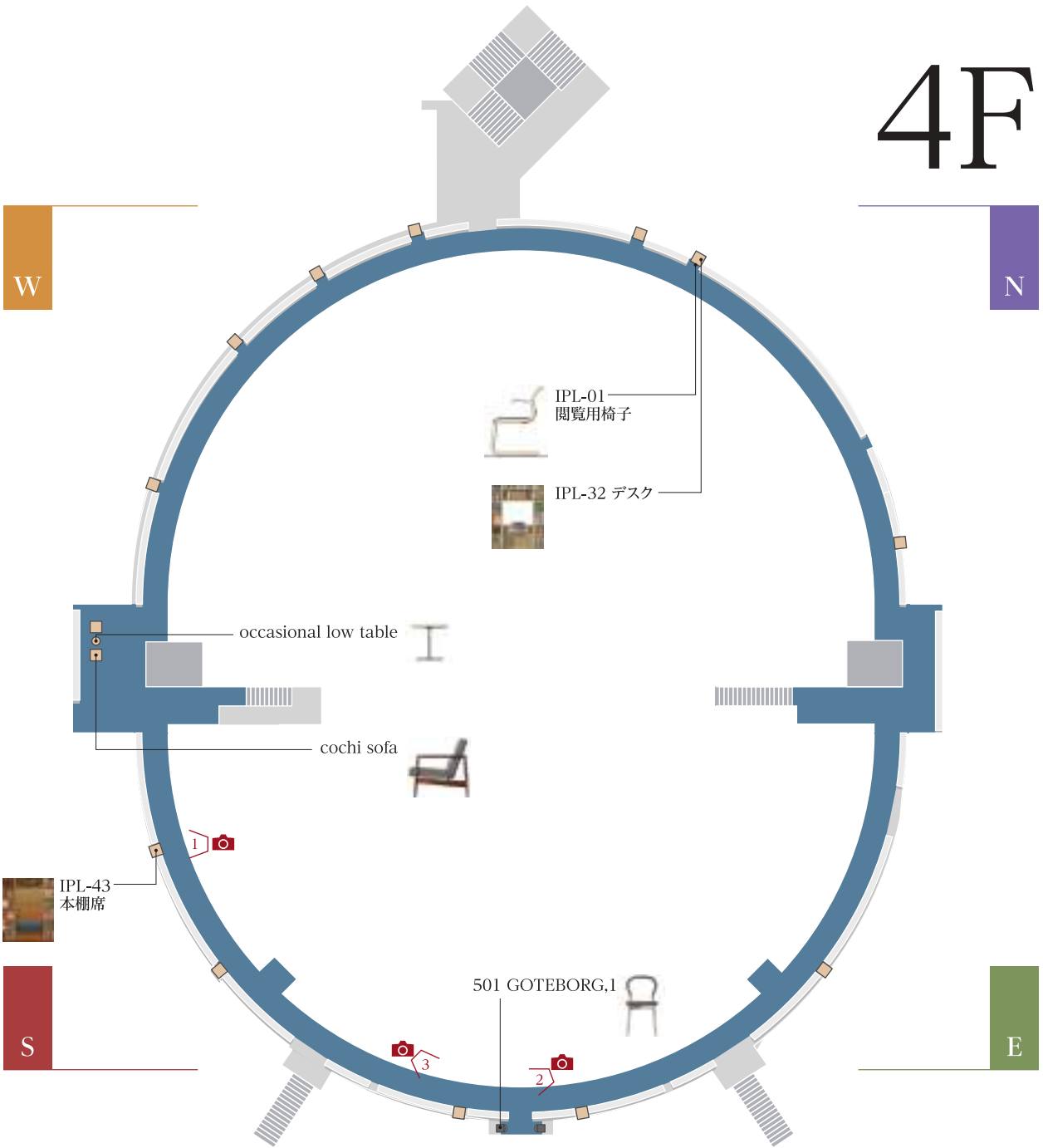
カメラ 5



カメラ 6



3F閲覧エリア



1



2



3



ハンギングエッグチェア

ヤマカワラタン ジャパン
(日本)
デザイナー：Nanna Ditzel
1957

藤の強靱性と柔軟性を巧みにアレンジし、その特徴を見事に生かした北欧のブランコチェア。世界中で永く愛される名作のひとつ。



kiik ベンチ / ソファ

arper
(イタリア)
デザイナー：岩崎 一郎
2018

そのモジュール性と多様な構成によりあらゆる空間に適するよう想定されたkiik。



Sacco

zanotta
(イタリア)
デザイナー：Piero Gatti / Cesare Paolini / Franco Teodoro
1968

固定された形態を持たず、使う人の体に合わせて変形するという全く新しい発想から生まれたイタリアデザインを象徴する椅子。



ラウンジアーム

桜製作所
(日本)
デザイナー：ジョージ ナカシマ
1962

自然の無垢板を使ったアームが美しい最もナカシマらしいデザインのラウンジチェア。



RO chair

Fritz Hansen
(デンマーク)
デザイナー：Jaime Hayon
2013

デンマーク語で「静けさ」を意味するRO chair。このラウンジチェアはくつろぎの空間と自分自身に戻るひと時を生み出す。



Organic Chair High back

Vitra
(スイス)
デザイナー：Charles Eames & Eero Saarinen
1940

「オーガニックチェア」の特徴的なフォルムとコンパクトなサイズ感はそのまに、高めの背もたれと広めの肘掛けを備え、読書に適した椅子。



CH07 Shell Chair

CARL HANSEN & SØN
(デンマーク)
デザイナー：Hans J. Wegner
1963

ハンス・J・ウェグナーの、どこから見ても美しく、裏表があつてはならないという信条を体現した椅子である。



BKF chair

CUERO
(スウェーデン)
デザイナー：Antonio Bonet / Juan Kurchan / Jorge Ferrari Hardoy
1938

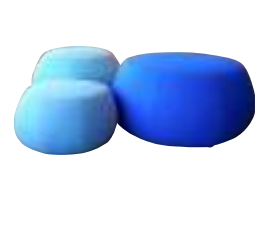
スチールパイプのフレームにキャンパスなどのフレキシブルなシートを張ったり、吊り下げる構成の椅子は、カジュアルな椅子として日本でも流行するが、BKF chair はそれらの先駆けとなった。



バタフライスツール

天童木工
(日本)
デザイナー：柳 宗理
1956

日本の工業デザインの礎を築いたデザイナー・柳宗理によってデザインされ、ジャパニーズデザインのアイコン的家具。



pix

arper
(イタリア)
デザイナー：岩崎 一郎
2010

コントラクトユースからホームユースまで、あらゆる空間にアイコニックでカジュアルなムードを添える。



Slow chair

Vitra
(スイス)
デザイナー：Ronan & Erwan Bouroullec
2006

このニットテキスタイルは、伝統的なソファの厚いクッションに代わり、軽量でありながら編みの弾力によって柔らかく包み込まれる様な座り心地を実現している。



Nelson Mashmallow Sofa

Harman Miller
(アメリカ)
デザイナー：George Nelson
1956

人々の注目を集め続けてきたこのソファは発売当時、量産が難しく製造打ち切りとなったが、40年の時を経て復刻され、アメリカ・ミッドセンチュリーの象徴的な椅子となっている。加賀五彩をあしらった特別仕様。



SHOEMAKER CHAIR NO.42

Werner
(デンマーク)
デザイナー：Lars Werner
1970

牛の乳搾り用として永く使われてきた椅子が、靴職人がお尻の形に合わせて削ったことをきっかけに、現在の形に近づき、シューメーカーチェアと呼ばれるようになった。



N65

artek
(フィンランド)
デザイナー：Alvar Aalto
1935

すっきりとしたラインとシンプルな構造が特徴のN65。フィンランドにおいては何世代にも渡り、子供たちの暮らしの一部として親しまれている。



kinoe ベンチ

飛騨産業
(日本)
デザイナー：貝山伊文紀
2016

笠木にヒノキやスギの枝、スポークにブナ、座板に栗と、素材を適材適所に用い、森林の持続可能性をコンセプトに開発した家具シリーズである。



Tsukue-bako

大雪木工
(日本)
デザイナー：小泉 誠

コンパクトなパーソナルデスクである。シンプルなデスクはもちろん、様々な用途として部屋の中に部屋をつくる、可能性にあふれた小空間である。



BRONX 1010

Cassina inc.
(日本)
デザイナー：川上元美
1992

1977年のAIA(アメリカ建築家協会)主催の国際チェアコンペティションで一席になったBLITZ。BRONXはその弟分として、シャープなフォルムで商品化された。



SEOTO

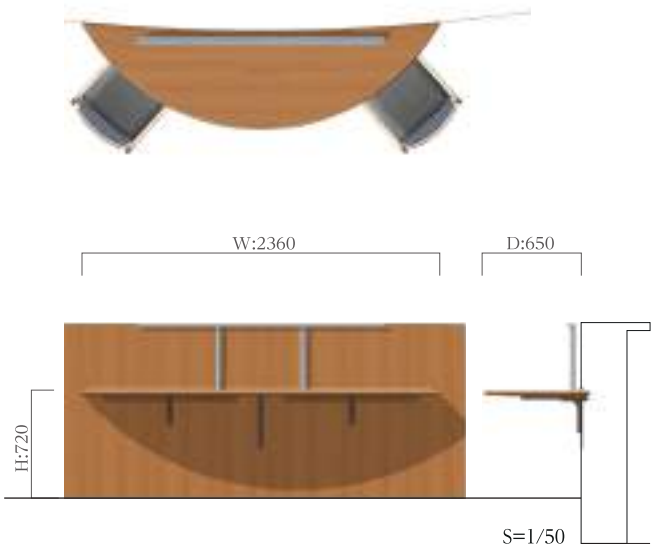
IPL-24 ブース席 (対面)

大閲覧空間の円形書架に沿って設置された対面タイプの閲覧デスク。正面と通路側に目隠しパネルを設けたライトな個人席としている。パネル上部には透過性のあるアクリル板を用い、歩行時の視界を妨げないよう配慮している。



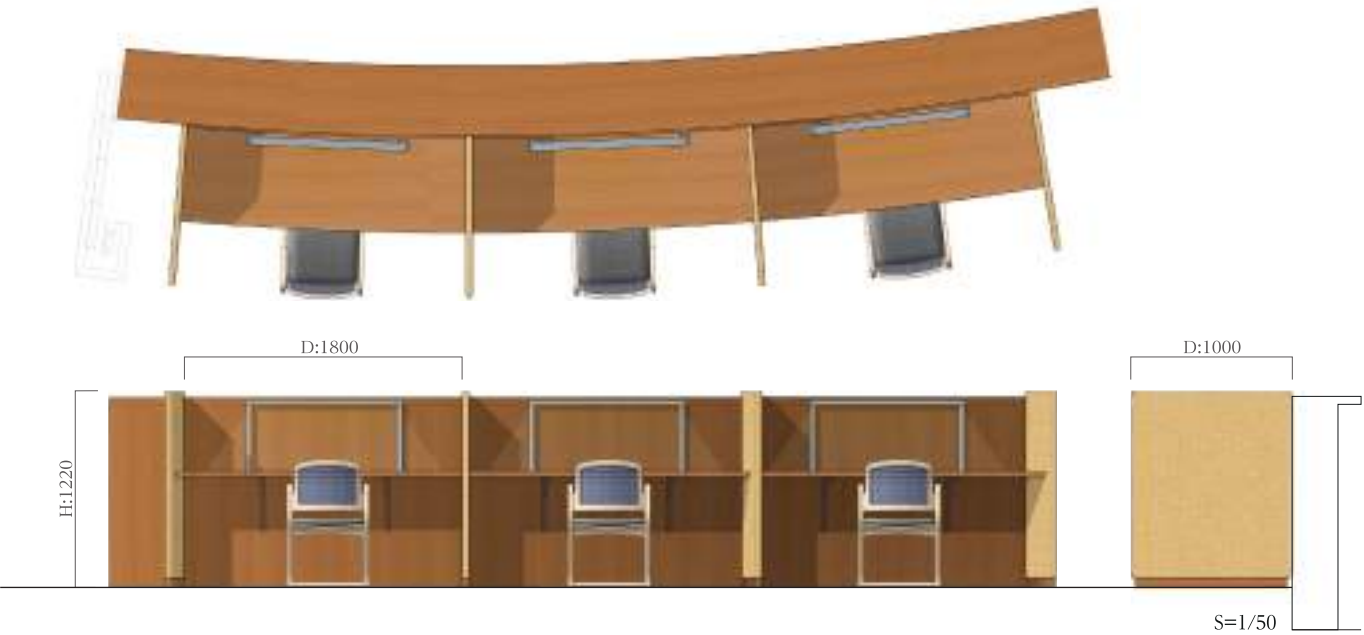
IPL-25 三日月デスク

大閲覧空間の円形書架に沿って設置された2人用の三日月型デスク。照明は特注でデザインしたLEDランプ。



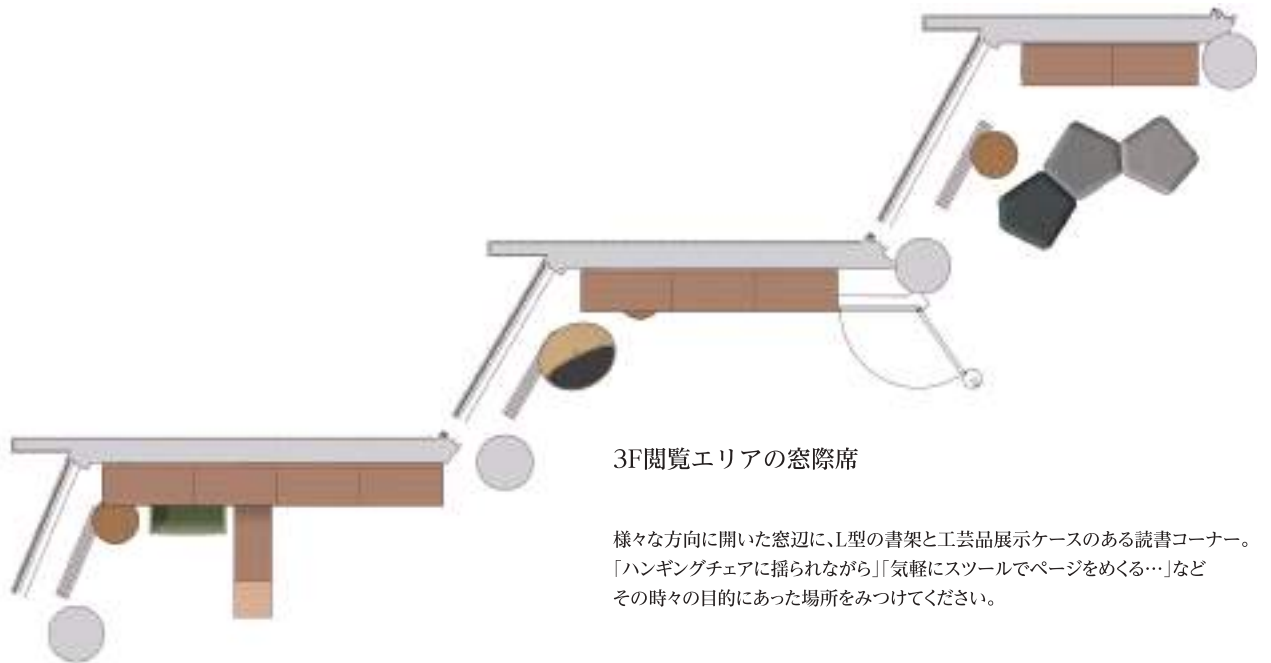
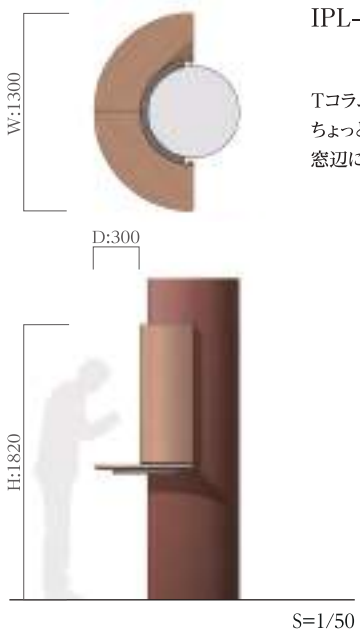
IPL-31 ブース席

大閲覧空間の円形書架に沿って設置された閲覧デスク。足元まである目隠しパネルにより、横並び席の中では比較的パーソナルな位置付けとなる半個室のブース席タイプ。



IPL-22 書見台

Tコラム(丸柱)に巻きつくように設けられた書見台。ちょっとした本の内容確認や調べ物での利便性を考慮したカウンターで、窓辺にはハイチェアをセットにした場所もあり腰掛けて読むこともできる。



3F閲覧エリアの窓際席

様々な方向に開いた窓辺に、L型の書架と工芸品展示ケースのある読書コーナー。「ハンギングチェアに揺られながら」「気軽にスツールでページをめくる…」などその時々目的にあった場所をみつけてください。



IPL-06 三角ソファ(小)

書架の端部にできた三角形の余白を活かしたソファ。
ゾーンに合わせたカラーで、大・小の2タイプがある。



S=1/50

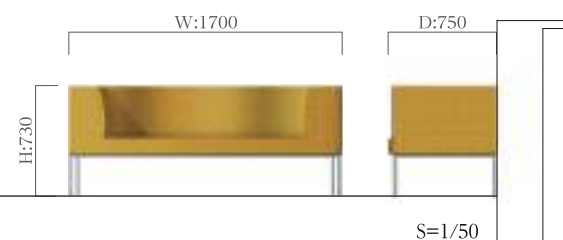
IPL-07 三角ソファ(大)



S=1/50

IPL-19 ソファ

大閲覧空間の円形書架に沿って設置されたソファ。
やや内向きに設定した座席が包まれるような印象の2人席。
加賀五彩に準じたトーンの異なる色の張り布を使用している。



S=1/50

IPL-03 4人掛けソファ

IPL-19のバリエーションで座を十文字にレイアウトしたソファ。利用
者が四方に外向きで座ることで互いの視界から外れ、群でありながら
個の領域を確保している。

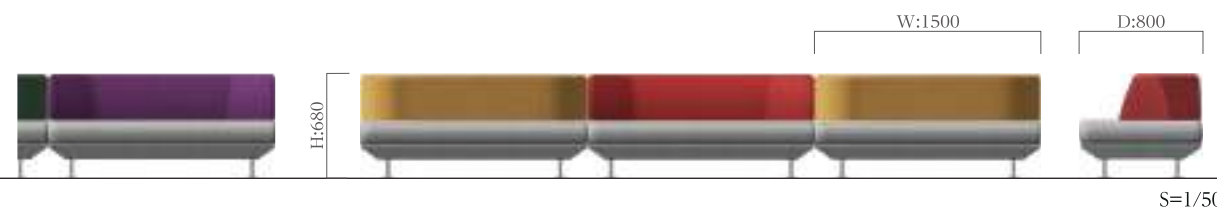


S=1/50

IPL-04 ソファ

2Fの直線メイン通路に設置した、逆方向の3席が1対に並んだソファ。
加賀五彩のうち方位に使った4色を背もたれに使用しており、着座した
席の背と、正面に見えるゾーンの色が一致するように設置されている。
また、イベント時などで同じ方向に座るレイアウトへの変更を考慮して、
反転しても背が揃うよう形状を工夫している。

(草・黄土・臙脂・古代紫の各色がそれぞれ座った先の東・西・南・北を指し示す)



S=1/50

IPL-18 三日月ソファ

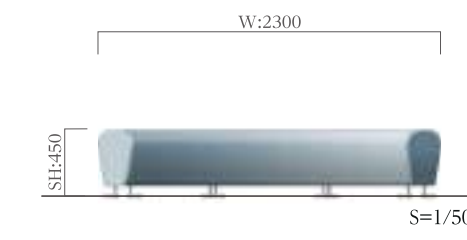
大閲覧空間の円形書架に沿って設置されたソファ。半円状のオープンな
形がフレンドリーに人を迎える。張り布の色をそれぞれの方位に合わせて
いる。



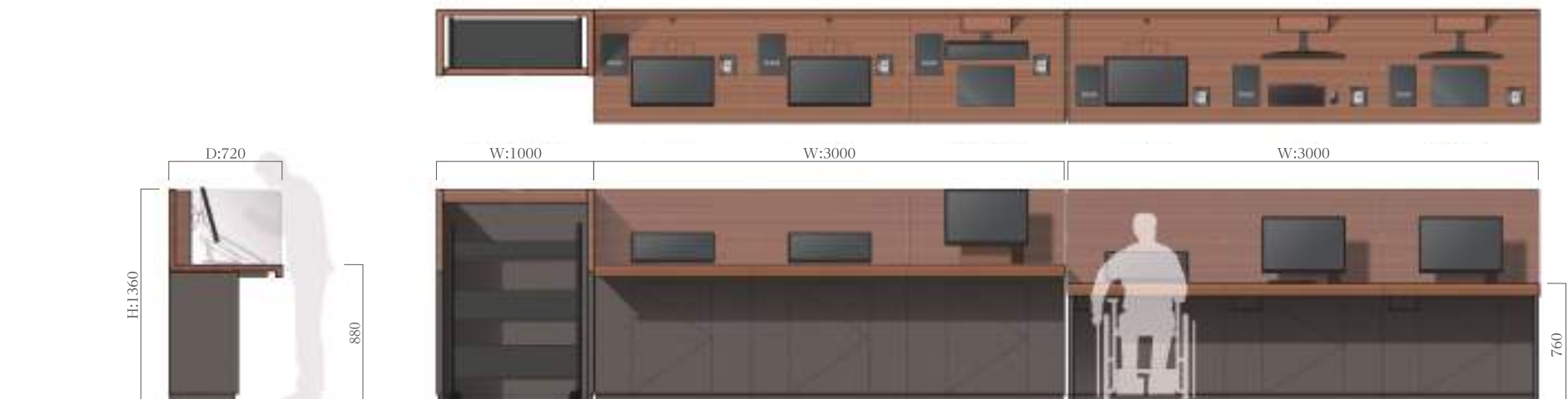
S=1/50

IPL-45 3人用ベンチ

2F・南のラーニングスペース窓辺に合わせデザインした
ベンチ。だんだん広場や研修室に近いこともあり、読書
のみならず来場者の交流などでの利用も想定し、自然に
視線が変わるような優しいR形状とした。

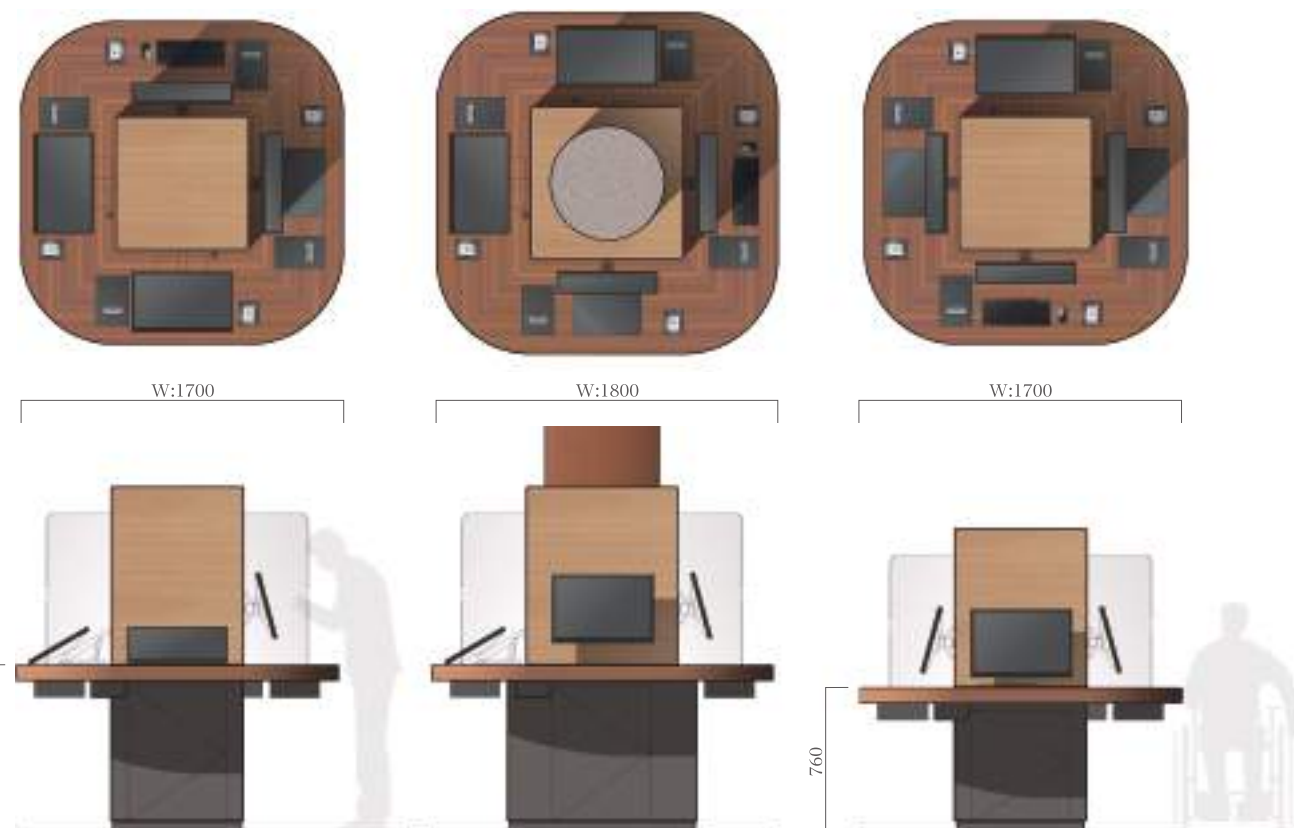


S=1/50



セルフステーション(デスク型)と棚にもどす本(ICアンテナ付き返却台)

丁寧に加圧プレスすることで強度を持たせた杉圧縮珪目材を使った、端末機器のためのステーション。杉珪目の持つ源として直線の引き立つ木目が、無機質になりがちな機器スペースに上質な表情を与えつつ、ダイナミックな閲覧空間と調和する存在感を狙った。それぞれ高さ違いで2タイプのバリエーションがある。



セルフステーション (タワー型)

書架の連なりの中に立ち、空間のポイントとなるタワー型ステーション。異なる杉珪目材の使い分けが高さによる圧迫感を和らげ、視覚的な軽やかさを演出する。柱を囲むタイプ、着座・車椅子での利用を想定した低いタイプ等のバリエーションがある。



1



2



3

1・2:杉圧縮珪目材の天板にならぶ端末機器はユニバーサルデザインも考慮して全て埋め込み、操作性を高めた。また機械的な要素を隠すことでシンプルでモダンに見せながら、利用者自身が操作するというハードルが下がることも期待している。

3:エリアナビの背面合わせレイアウト。



BOOK NAVI

予約端末台

館内の様々な場所にあるBOOK NAVI(誘導タブレット)と、サイレントルームや予約本コーナーの端末機器のための台。ミニマムな要素で主張を抑えながらも、セルフステーションと同等の材・仕上げにより統一された上質さを持つ。タブレットケース・スタンドもオリジナルデザインで製作した。



エリアナビ

サテンシカモア積層合板の美しさと、背面プルテンボードの柔らかな印象がもたらす親しみのあるデザイン。黒く重たい大型タッチモニターを軽やかに支えながら、キャスターでの移動・背面合わせ設置への対応など、機動性も考慮されている。